愛知教育大学教育実践総合センター紀要
第4号，pp. 27～34（March, 2001）

ある政治的教育学者の生涯から

－パウル・エストライヒの自伝の抄訳（4）－

舩　尾　日出志
（社会科教育講座）

AUS DEM LEBEN EINES POLITISCHEN PAEDAGOGEN

－Die Uebersetzung der Selbstbiographie von Paul Oesetreich（4）－

Hideshi FUNAO
(Lehrstuhl fuer Gemeinschaftskundeunterricht)

Resuemee

In diesem Aufsatz haben wir solchen Abschnitt (etwa 1933－1943) der Selbstbiographie von Paul Oesetreich, der die "tiefste Umwertungszeit" seines Lebens beschreibt, uebersetzt.

Oestreich schrieb denn in seiner 1947 veroeffentlichten Selbstbiographie, dass die Zeit im faschistischen Kerker die "tiefste Umwertungszeit" seines Lebens geworden sei. Seine in diesem Abschnitt der Selbstbiographie immer wieder gegebenen Hinweise gerade auf seine Kerkergenossen, deren Solidaritaet ihm Kraft gab － das ist wohl sichitbarer Ausdruck dafuer, in welcher Richtung sich seine politische Haltung in dieser "tiefste Umwertungszeit" seines Lebens bewegte. Nach 1945 gehoerten die aus den Konzentrationslagern, den Zuchthaeusern und Gefaengnissen Entlassenen zu den aktivisten Kraeften fuer die Ueberwindung des Faschismus und fuer den Aufbau einer demokratischen und sozialistischen Gesellschaftordnung.

Der folgende Abschnitt aus Oestreichs Selbstbiographie zeigt weterhin, wie Oestreich die faschistische Paedagogik und ihre Auswirkungen auf die Schule und die Jugend in ihrer ganzen Unmenschlichkeit durchschaute und anprangerte.

キーワード：パウル・エストライヒの自伝，ナチス体制下の教育，徹底的学校改革者同盟

1926年から1946年までの自伝[1)]

（承前）

しばしばエセ国民的報道のなかで侮辱された全体性の中心ポイントから国民性と人類性を求めた先駆者たちにとって，今や引退し，沈黙することが当然，予測される行動であった。その誘惑は現実的であった。しかし良心は相当に強力であった。数千人の良き人々は徹底的学校改革者同盟のなかにかれらの精神と魂の故郷をみいだしていた。いくつかの新しい火災が突如起こったかのようであった。バイエルンではわたしの数回の講話の後，活発な青年教師グループが形成された。（1932年でもまだわたしはクルムバッハのオーベルフランケン地区教師グループのなかで，ナチスの副報告者であったシュタルク《Stark》教授を諭すことができた。）わたしたちの雑誌は維持された。最良の国民陶冶的活動方法がさまざまな同盟グループのなかに生じていた。もちろん固有の力は衰弱したが，わたしが招かれた講話の数は数倍になった。幼児会議《1932年10月にベルリンで開催された徹底的学校改革者同盟の研究大会。同盟の枠を超えて多数の教育学者，教育者が参加した》の期間ずっと襲った重病は，わたしをほとんど何もできなくさせた。しかし粘り強い意志，緊急の使命への信念はわたしを再び元気づけた。わたしがナチス党員である敵に遭遇した場合，それは，デマゴギー的悶着のための「材料」を演説から取り出すためにのみやってきた人間的卑劣漢との出会いであった。あらゆる閉会の辞はまだきわめて深く潜んでいた共同の基盤を知らず，自主的で，買収されることのない思想家にたいして限りなく憎悪で満たされて，ただ抹殺しようと欲するだけのあの非ドイツ的な憎悪のドイツ気質への無血の断罪となった。

1932年末，ナチスの選挙での敗北後，ドイツでは困窮とナチスを除去する死を賭した行為が可能であった。しかし諸政党と軍隊には男らしい男はいなかった。かくして災厄がやってきた。1933年1月21日わたしはブレスラウにおいてわたしの最後の，満員の公的集会をもった。嵐のような喝采（しかし疾患を抱えた心臓のせいでわたしは冷や汗を全身にかいていた）に迎えられた！9日後ヒトラーがやってきた[2)]。松明行進の

なかに，非常に才能に恵まれたわたしの教え子もいた。かれは『シュタルハルム』《ワイマル共和国の最大にして，最も影響力のあった武装組織。無制限の民族主義・報復主義的扇動をおこなった。1933年にはヒトラーの命令にしたがいＳＡに編入された》のなかで成長し，将校となることを欲していた。３年後，かれはわたしのもとにやってきた。極貧でボロボロの服を着て。自分の過去の錯乱を呪いながら！ユダヤ人の息子だったのだ！

当時わたしたちは，何が起こっているのかを知っていた。わたしがナチスの暗殺リストに載っていたので。選挙日（３月５日）頃は自宅から離れているようにとの警告の手紙が届いた。わたしの回答は，1932年と同じく，再びあのポスターに署名するということであった。そのポスターにおいてはマリア・ホダン《左派民主党員の知識人であったマックス・ホダン【Max Hodann：1894－1946】の妻》の要請にもとづいて，ハインリッヒ・マン，ケーテ・コルヴィッツ《Kaethe Kollwitz：1867－1945》等のような無党派の人々が共産党と社会民主党に，ドイツを無法者たちから救うために，戦術的に統一を組むことを要求している。たとえその呼びかけがきわめて見込みがないものだとしても，決定がおこなわれようとしている場面で，沈黙することは惨めではなかったろうか。パウル・エストライヒにとっては，いずれにせよ『容赦』はなかったのだ。

「もはや名誉ある選挙はおこなわれなかった。国会議事堂の放火，すべての共産党員，多くの社会民主党員，労働組合指導者および平和主義者の拘禁，共産党の非合法化，テロ，パニック！ハルツブルク連合《ファショ的諸潮流を統合していたグループ》が「合法的」勝利をくすねた。離反はわたしたちの同盟のなかでも始まった。徹底的学校改革者同盟の地域グループと邦連盟は消滅し，凛々しいはずの男たちが退却への口実をためし，そして発見し，同盟のなかの国民的《「国民的」はナチスが好んで用いた言葉》ろくでなしどもが，わたしにたいし「離別」のために無礼な言辞を弄し，病的な放浪者たちと「ノーマルな」卑しい者たちが，わたしに地獄のような孤独への転落を嘲笑的に告げた。３月26日にわたしの横に幹部の残りが座りそして，同盟の文書と同盟の財産を救う方法を助言してくれた。なんと素早い行為か！すでに27日に，さまざまな「圧力をかける」書簡が郵便受けにあり，秘密警察がやってきて，そして事務机と書類戸棚のところでむなしくうごめいていた。秘密警察はその後わたしをホーエンツォレルン学校の校長控室で逮捕した。いかなる理由説明も，いかなる尋問もなしに。わたしは，非常に多くの人たちと同様に消えたのだ。犯罪者の独房に！わたしの左には本物の囚人（強盗）が，右には共産党機関紙『赤旗』の編集者が，さらに左へ４つ目の独房には共産党の指導者であったテールマン《Ernst Thaelmann：1886－1944》が，半階高いところ，向かい側には平和主義者クルト・ヒラー《Kurt Hiller：1885年生まれ》がいた。わたしたちは，外にいた頃，まだほんの少し前に文書上で喧嘩していたのだが，朝のシャワーの点呼に際して，鉄のドアの前で，頭を下げて会釈しあうことができたのであった。本当の犯罪者の戦線にばらまかれたドイツの最も積極的なエリートたちであった。震撼させる変革であった。独房（板張りのベッド，木製の椅子，トイレ，ブリキの鉢！）には春の日があたった。紙もなく，鉛筆もなく，ナイフもなく，時計もなく，夕映えもなく！まずはおかゆと堅いパンのみ，堅いパンのせいでわたしは一本の歯を折った。したがって入れ歯は８週間グラグラであった。心臓痙攣，下痢，診療を拒否する医師，やる気のない保健補助員（それがなんと，「わたしたちは労働意欲を諸君にまず教えることになろう！」と言うのだ）尋問と苦痛についての訴えは無視され，放置された。人道的な看守（「いまやここは精神病院だ」《差別的な表現》）と下士官的本性！逮捕されて４日目にわたしは55歳になった。わたしの勇敢なお手伝いさんは（かの女はわたしが拘留されているのを知るまで，長い間困っていた）わたしに誕生日の小包（スミレの束，わたしの息子の写真およびキャンディー）が届くように，最後まで頑張った。わたしは，数夜の神経の危機の後，その誕生日にはなんらかの口実によって釈放されるだろうという幻想的な確信をもっていた。事実，わたしの（ナチスに属す）生徒たちはわたしに電報を送ってくれたし，（しかし非常に敵対的であった）同僚たちも皆で１枚の葉書をわたしに届けてくれた（１週間後にようやくは手紙の束が届いた！）。同じ日に，初めてのマーガリンの塗られたパン，初めての入浴，初めての外出が！（とても高い刑務所壁の間にある中庭を，２本の銃に脅されながら１メートルの間隔をあけながら行進した。直ちにその群れ全体は身だしなみの悪さのせいで「生まれつきの犯罪者」のようにみえた）それからまた本当の犯罪者たちの解読不能の文字や呪いの言葉が落書きされた本もまた読めた。心からの憤慨と嫌悪とともに，わたしはクライスト《Heinrich von Kleist：1777－1811》の『政治論文小集』を読んだ！文書の交換は制約された。わたしの友人たちによって雇われた弁護士はわたしに会いにこなかった。一部は戦術上，一部は怨恨を抱いて書かれたわたしの書簡は検閲されるか，あるいは横領された（わたしが「もしわたしがわたしの金髪の息子を自分で教育してはならないとなったのなら，息子をユダヤ人の友人にくれてやる！」と書いたとき）。わたしの独りぼっちの一日を－12時間の「夜」！－縮めたのは書物であり（最終的には家の本を取り寄せることができた），洗濯や清掃であり，３回の食事，部屋のなか

での散歩（３歩の距離だが），外でのナチスの行進の機械的な騒音，定時的なグロッケンシュピール「いつまでも忠誠と誠実を！」であった。夜にはしばしば平静さを失った囚人たちがうなり，そして鉄の扉をドンドン蹴る音が暗黒の静けさのなかに響く。そして頭脳は疑念と不遜の両極の間を，つまり転向の誘惑から殉教の覚悟までの間を思い悩んだ。それはわたしの生涯の最も徹底的な価値転換の時代であった。その最初の10日間がすでに早くも過ぎ去ったとき，その実体はあらためて強化された。共同房（12人収容）への移動により，わたしは６日間にわたり共産党員，アナーキスト，若いプロレタリアート，ユダヤ人と緊密に接触した。二段ベッド，幅の狭い廊下，机と椅子，ついたての背後にはトイレが！「室長」は共産党の国会議員であったシュタインフルト《Erich Steinfurth：1896－1933》は，しばらく後に，ヴァンゼーでの「脱走の試み」の際に射殺された。信じられないほど興味あふれる共同体であった。隣の房には有名な人たちがいた。「外出」の際に，お互いに頷き合い，すばやく数語ささやきあった。一人の共産党の出版業者とわたしは，互いに揺るぎない監獄での友情を結んだ。半月後わたしはかれと（そしておよそ50人のその他の者と一緒に）懲罰期間であるシュパンダウに移送された。わたしの「保護検束」を継続するために。ごく小さな自動車の檻のなかで一緒に身を縮めながら，わたしはベルリンを通過しそして透き間から「外」を見た。普通の人々が散策している。誰がかれらの人生のそのような一時を消し去りえようか。シュパンダウでは様子が違っていた。人間的で，賢明な警部殿であった。ひとつの「留置所」のなかに35人。グループが形成され，カード遊びがなされ，討議され，されに歌われ，わたしは教育学の著作を勉強した（神経痛を伴いながら）。机の上には，共産党の幹部たちの著書，最後にはマックス・ホダンやクルト・アイスナー《Kurt Eisner：1867－1919。独立社会民主党員でプロイセン首相であったが，1919年に右翼の士官によって路上で暗殺された》の著書，息子の手紙があった。わたしの手からホウキを取り上げたのは，プロレタリア同志たちであった。「パウル，きみは年をとりすぎており，そして疲れ過ぎている。わたしたちならもっと楽にできる！」多少の，いや本当に僅かな放浪性はあるものの，素晴らしい選ばれた者たちであって，多くの者はまたそれほどまでに素朴でありえた。まったく嫌なことが我慢されねばならなかった。しかしわたしは息子に２度会うことが許された。わたしたちには，検閲済みの新聞を通して外の政治的諸事象を，その一連の違約および野卑を体験した。その際，しばしば嘲笑的爆笑が留置所全体に響いた。わたしたちのなかには一人のテンカン患者と数人のナチスがいた。若干の者は釈放されたが，他の者は苛酷な「判断」にしたがって牢獄に送られた。４月26日ついに，転換をもたらす書簡が届いた。ちょうど上級督学士官になったばかりのわたしの古くからの敵カール・フルク《Karl Pflug，ナチスではなかったがドイツの右翼政党の党員であった》が，公文書で，わたしに助けを提供することを表明する信用書簡を書いてくれた。神の心に匹敵する行為であった。（ロシア軍の侵入に際して，「国民突撃隊」《ナチ政権末期に16歳から60歳までの男性によって組織されていた》がヴァンゼーのかれの住居を占拠していたので，かれは夫人【ウルリケ・シャイデル：Ulrike Scheidel】とともに射殺されてしまった。したがってわたしはかれにたいしてかれと同様のやり方で感謝の気持ちを伝えることはかなわなかった）数多くの重要人物もまた直ちにわたしのために尽力してくれた。ベルリンからの書簡がシュパンダウに届くのに３週間もかかっていた。しかし今では，「警部殿」が電話したので，すぐに届くようになった。それどころかわたしは復職すべきとされた。とはいえ警視長であったミッテルバッハ博士は，重要な協議の後，わたしを「餌食にし」た。かれはわたしを解放したくなかったのだ。フルクの個人的な保証があって，ようやくわたしは５月19日に自由になった。なんという自由であることか！その間に徹底的学校改革者同盟は，ナチスの体制に「順応」したくなかったので，自主解散していた。同盟の機関誌「新教育」は，フェゲザックの教員組合によって弾劾されて，チューリンゲンですでに発禁となっており，瀕死の状態であった。わたしは新たな健康回復のための休暇をとった（最初の休暇は刑務所のなかでリューマチを患うという結果で終了した。）しかし休暇地であったコルベルクで，わたしに「調査用紙」が届いた。そこでは徹底的学校改革者同盟もまた罰すべき組織であるとされていた。わたしには免職の脅しがかけられ，ベルリンにおいて８月初めにわたしは教職を一時解雇され，９月30日には書留郵便で最終的に正式に解雇された。陰鬱な夕方にわたしは，わたしが29年間活動したホーエンツォレルン学校の（間もなく自殺することとなった）校長にわたしの鍵を手渡した（５月20日にわたしはわたしの研究室のタンスのなかに隠していたリボルバー，それを保持することは当時，刑務所行きに匹敵する行為だった！のだが，を取り出し，そしてある墓地に弾丸を抜いて埋めていた）。さらに時折，一連の官憲による面倒事が続き，そして大沈黙，つまりローマ帝国時代のキリスト教徒が隠れ住んだカタコンベのごとき存在とあいなった。数年後にはわたしは執筆者年鑑や百科事典からもまた排除された。ようするに起こったことというのは，燃えさかっていた灯火が踏み付けにされ，そして地下牢のなかに投げ飛ばされたとういうことなのであった。大々的な沈黙の時代がやってきたのである。

わたしにとって次から次へとショッキングなことが

起こった。わたしの息子の母親は女性ナチス党員（Pg-in）になり，そしてわたしを無神論者，共産主義者，謀反人であると告発した。息子を，そして最後の財産を我が物とするために。しかしその時代でさえ裁判官はかの女の言い分を退けた。「売却されたものは戻ってこない！」とはいえ，わたしには尾行がつけられ，そして監視された。何よりそれを隣人がおこなった。それゆえわたしの家には訪問者がほとんど敢えてくることはなかった。友人たちは臆病になり，まさに「忠誠心ある者」となった。ザクセンの女性教師は勇敢にもわたしに手紙を出した。「わたしたちがこんなにも容易にアドルフ・ヒトラーについて分かることができたのは，あなたの活動のおかげです！」かの女は理想と戯画の，十分に発酵させることと暴力の，愛と憎悪の二律背反をみなかった。わたしは故意に歪められたパウル・エストライヒ像に愕然とした。つながりは途絶えた。あらゆる人は個人的に自身の小さな部屋のなかで発展を遂げた。再び出会ったとき，バベルの塔のような言語の混乱があった。かくして少なからずの人々はかれらの強いられた貧困の困難のなかで映画資本，住宅資本，産業資本に貢献するようになり，そしてかなりの犠牲をはらって闘い取られた安寧のなかで，かれ自身みずからがペテロの否み《イエスの一番弟子であったが，イエスの逮捕後，一時イエスとの関係を否定する発言をしたエピソード》をおこなっているのを自覚することなく，古典的な言葉を語った。なるほど静かな中休みの後，小さな会話サークルが再結成され，そしてわたしたちは当時注目に値する解明をおこなった。しかし待ち時間はあまりにも長すぎ，脅迫はあまりにも恐ろしく，人々は年をとりすぎそして疲弊し過ぎていた。数年後にはあらゆる人は孤立していた。ある人はびくびくして，むしろ熱弁をふるって，奇跡を期待し，他の人は次第にそのさまざまな成果によってナチスの政策の意味を確信し，自分の子どもたちを通して密接にかつ苦しみを伴いつつナチスの政策と結合した。かくして書簡の交換もまた，わたしは再三軽薄な無鉄砲者であると感じられていたので，消滅した。一定数の人は誕生日のカードは届けてくれた。数十人くらい。生活は厳しかった。しかしわたしには子どもと家があった。その家のなかでは，同僚・同志である一人の女性が，称賛に値するほど卓越した仕方で，わたしと息子を世話するためのかの女の生活の相当の部分を提供してくれた。そのようにして自ら真の生活のセンターを創造しながら！

孤独な思考が始まった。数年間にわたってわたしは強力な研究のなかで第三帝国の教育学思想の手掛かりをつかもうとした。しかしわたしは何もみいださなかった。存在したのは鉛のような純血種の小男《ヒトラーのこと》の周囲の大袈裟な雰囲気であった！クリーク《Ernst Krieck：1882－1947》の著書『民族政治教育』は，劣等感にもとづく人種感情に由来する不正確な決まり文句的誇張および，とはいえ根気強い勤勉さと巨大な知識による誕生してはいるのだが，ナチス党の教育学バイブルとなった！教育学雑誌においては理念の撤退があり，総統と人種についての憔悴した大仰さが登場し，しかし学校と教育の崩壊から肯定的なものを蒸留しようとする自己努力も，当然無益な試みだが，みられる。教師たちが，自由主義的・民主主義的な百年の伝統を捨てて，可能なかぎり多くナチス党の大管区長官や軍隊の班長を配置するという唯一の野心とともにナチス時代の制服訓練に心を揺らしたことは不名誉である。教師は，若年層の教師の場合は，ナチス党職員，ＮＳＶのブロック指導者であったり，ＫｄＦの催し《ＮＳＶもＫｄＦもナチス党に従属する組織》，人種研究等々において活動するべきであるとされた。良心と魂はかれらから奪われた！ペスタロッチの息子たちは下士官や行政の下っぱになってしまった。にもかかわらず（あるいはむしろ，それゆえにか）教師身分は以前に比べてより深く，社会的な軽蔑的評価の深遠に落ち込んでしまっている。教育に熱中する教師はまもなくもはや存在しなくなってしまった。あらゆる行為はナチス党の足跡のついた黄金政策におもねっていた。さまざまな雑誌のなかで次第に再び問題として提起されたことは，リベラルな帝政時代，および今度は本当のことだが《「リベラルな帝政時代」というのは誤りだが，次のワイマル共和国についての定式化は間違っていないという意味》，非常に悪口を言われた体制の時代《この表現はファシストによって用いられたワイマル共和国にたいする定式化》が無尽蔵の実り豊かさのなかで生み出した豊饒な思想からの，無内容な（しばしば無害かつ天真爛漫な）借用であった。

ヒトラーがその玉座に掲げていた失業も，「革命を引き起こす失業」も次第に止んだ。というのはそのすべての形態における武装が全労働力を収容してしまったからである。大学入学資格試験合格者たちは，たいていそのかなりの数において，簡単に将校となり，きわめてすみやかに名声と金銭を手に入れ，さもなくば軍事技術者や技師となった。講義室は空になり，若い教師は存在しなくなった。「学校補助員」が採用され，学習は暗記に変わらざるをえなかった。教職の「上昇」野心は泥沼や浅瀬のところで止まっていた。実際，教育的・道徳的な点においては空虚な教職が生じた。というのは中等学校の学士たちもまた初期の防衛以降《当時の中等学校の教師は必ず大学卒であった。かれらもまた当初多少はナチスに抵抗したことが分かる》は畜殺から守られていなかったからである。つまりナチス党員でない者はもはや採用されることはなかったのである。公式の場における仮面が生じた。その仮面から叱り，かつ強要し，その仮面の背後で苦悩した。

「冗談」のシニカリズムもまた花開いた。学校は，そして中等学校は民衆学校よりもいっそう，ナチス党とヒトラー・ユーゲントへの悲劇的で，恥知らずな従属に陥ってしまった。さまざまな葛藤のなかで，学校は常にごく安易な葛藤を採用した。落ち着きのある連続的な作業様式は決して達成されることがなかった。教練，人垣《送迎，護衛のために編成された二列隊列》の形成，あらゆる可能なものと不可能なものの収集が存在意味であった。いかなる作文テーマも誠実に論じられなかった。清麗な討議はもはや存在しなかった。クリークはその「人間形成」《エストライヒはここで1925年に出版されたクリークの著書『人間形成』を引き合いにだしているのである》を前に，かれの社会学的思い込みにもかかわらず，愕然とせざるをえなかった。

それ自体喜ばしい教育所掌機関の邦部局から全国省への移行はルスト《Bernhardt Rust：1883－1945，はナチスの帝国教育大臣であった。1930年には，かれはなんと精神錯乱の兆候を理由に教職を追放されていた》の無内容と無能力のゆえにあらゆる教育機関の集中的かつ全面的没落をもたらした。かれの「徹底的諸改革」は中途半端で，表面的でしかなかった（平和と戦争のなかでの全体的軍事化によって，あらゆるプランの開始が間断なく破壊されたということは，その「古くからの闘士」《ルストのこと》にとって免罪とはならない）。なるほど「中等諸学校」は「統合」された《さまざまな形態の中等学校は，若干のギムナジウムを例外としてオーベルシューレに統合された》。しかしそれは豊かさのための統合ではなく，貧しさの「統一」であった（本当の，実りある統一は「弾力的統一学校」《拙著『パウル・エストライヒ』学文社1996年参照のこと》の枠内でしかおこなわれない）。ギムナジウムは若干の手本のために，そして萎縮された形態において存続し，「オーベレシューレ」はよりいっそう民族主義的になり，そして新しい，ほとんどなじみのない外国語としてゲルマン学を設けるようになった。上級段階におけるその綱領的な分岐点《つまりギムナジウムとオーベレシューレの個別化》は無意味な冗談でしかなかった。民衆学校はいっそうしぼり尽くされた。中間段階・選別段階（ハウプトシューレ）は徹底的な大混乱をもたらした。あらゆる学校種は，その恒常的な「オーバーホール」のなかでの「志操教授」の精神圧殺的優位のもとで，等しく苦悩していた。それに比べれば，古い教会強制が自己存在の抹殺を仄めかして脅した圧迫ですら寛容であるように思えた。そのむっとさせる内容は最終的に，その方法はとんでもないものであったが，達成された超宗派統一学校にたいする正直な喜びを生じさせなかったし，ことにその方法もまた再び古典的な暗記術に落ち込んでしまった。最も控え目な形態における労働教授についても時間と能力，そして愛！が欠落している。体育，音楽そして「芸術」は余すところなしに，例えば国民生活にではなく，ナチズムに奉仕させられ，そして端的に言えば，それらのなかでおこなわれたさまざまなことは，真の陶冶への嘲笑であった。他方では繰り返し「競技」がいわゆる最高の記録，最高の成績を提示し，しかもその成績をその後，何らかの仕方でヒトラー・ユーゲントが得たようにしたのであった。実験授業はよりお粗末になる素材や装置不足のなかで劣悪なものになるか，あるいは消滅した。ヒトラー時代になるやいなや，私立の（補習的）教育と家庭教師の新しい盛期が始まったことは特徴的である。というのはまさに学校自体はその混乱した過度の煽動性のなかで，ほんの少数のかなりの才能ある者だけがなんとか独力で卒業できたからである。残りの生徒たちは多かれ少なかれ，補習授業を受け，そしてかれらがようするに軍事能力だけでも有し，あるいはかてて加えてナチスの暴力装置であった親衛隊（ＳＳ）に加入する用意でもあれば，知識なしでも最終的にはほぼいつも「卒業資格」を得た。そのような人材しか有しない，なんと貧困な大学よ！

しかし家庭教師は繁盛した。「政治的にあてにならない」として首になったわたしたちだけは家庭教師の仕事を許されなかった！したがってわたしもまたようやく戦争が始まってから「非合法」に若干の生徒のところに通うことができた。かれらによってわたしは諸学校のほぼ全体的な欠陥を憂鬱な気持ちで研究することができた。「生産学校理念」をライ《Robert Ley：1890－1945》やアルンホルト《Karl Arnhold：1884－？》は継父《好ましい表現ではないが，ここでは「生産学校思想の正しい担い手ではない」ということを意味している》の手から受け取った。したがってその理念はもはや再認識されなかった。今や，計画されている教授施設から実際に，敵がわたしたちに意図的に誹謗したことが生じた。つまり青少年を「生産」に，つまり企業と国家における新たな農奴制に引き渡す場が。誰ももはや自分で就職先を決めることがなくなったが，しかしあらゆる者が就職した。その者たちの志操にしたがって。「民族政治陶冶施設」と「オルデンブルゲン」《民族政治陶冶施設は全寮制高等学校であった。そこでは人種主義的なエリート観念にしたがって，さまざまな社会領域のためのナチスの指導後継者が育成されるべきであった。オルデンブルゲンでは同じ基本原理にしたがって25ないし30歳の男性たちがナチス党後継者として訓練された。そのための準備施設として「アドルフ・ヒトラー学校」が設置され，そこには12歳の少年たちが収容された》は陶冶思想によってではなく，出世をめざすドリルによって支配された。「勤労奉仕」は，それは当初はまだたいてい民衆の力を生かそうという思想を取り入れていたが，間もなく徴兵期間の偽装延長となった。

年老い，そしてあくまで理想主義的である教師は，そのような教育の惨状を悲しむか，あるいはいい気味だと喜んでいた。教育の惨状は戦争によって破局の極みに達した。当初は1914年のような感激はなく，（独裁者の）厳しい強制にたいする忠誠があった。しかしその後は，長年の間に，ますます権力の論理，優越信条，いかなる犠牲をも厭わない勝利に熱心に取り組むようになった。それらはますますより徹底的にドイツ民衆を，特に青年と婦人を自己賛美の袋小路へと追いやった。その袋小路からは，世界が，そしてより正しく言うならば理念と理想の世界が，大いなる頑迷のなかで素朴に軽視され，かつ退去を命ぜられている状況であるので，浄化する敗北という脱出口がわずかに存在するだけであった。学校は科学，技術，精神のどれにおいても貧民院となった。その貧民院は最低限の知識を，ヒトラー時代が必要とし，そして甘受する範囲でのみ提供し続けた。その貧民院はしかし歴史的なものにおいては，ドイツの理想主義的な過去のすべてに唾を吐くドラマティックな煽動図書から，そして奴隷化されているかあるいは従順である教師の口から，「ナチス的な」虚偽の歴史を無防備な青少年のなかに無理に流し込んでいる。「ナチス的な」虚偽の歴史は無防備な青少年を石器時代的世界理解への心からの従者にする。次のことを思い出すことは，恐ろしいことである。すなわち諸学校が，教師の数の不足，教師のあわただしい変動，スペースの不足，図書の消耗，常時に変更され，かつ反故にされる時間割，ますますひどくなる教具・教材の不足，子どもたちの地方への移住，つまり学童疎開によって，さらに一団の年老いた白髪の教師あるいは戦争で負傷した教師たちによって，どれほどのたうちまわっていたかを。生徒には，ますます規律と秩序が，習慣と自信が欠落するようになった。かれは，かれが時代の嘘をすでに見抜いている場合でもまた，無意味で芯もない授業の終わりを，無駄な暗記が終わり酔い心地にさせる時の始まりのように，少なくとも生活不安を和らげる体験への救済の時の始まりのように待ち焦がれていた。というのは生涯の職業選択についての気掛かりな問題は戦争の末期にすでに再び，そして引き起こされた失業の真っ只中にあった1932年よりもさらに解決の見通しなく，あらゆる歪められていない頭脳の前にあった。最高に無責任なヒトラーのデマゴギー的な偽りの解決はすべての青少年に戦争ロボットという烙印を押した。今や勝ち戦か，敗戦かに関係なく，かつてわたしたちの心をおおいに動かした個々人の召命の問題，個々人の倫理的幸福の問題はもはやなく，個々人の利用の問題があるのだ。隷属させられ，憎悪に満ちた諸国民のなかでの長年にわたる歩哨，あるいは労働大群のなかでの長年にわたる補償！10年の長きにわたって俗物根性へと「教育されてきた」青少年はどのようにすればせめて，かれらが最も素朴な文化機能を果たしうるほどの職業訓練をされるのであろうか！

（ナチス側から提唱された）初期の虚偽スローガン「国民性への自由な道。さらに他の国民性への尊敬を！」は青少年を感激させることができた。しかしポーランド，ノルウェー，オランダ，ベルギー，フランス，ユーゴスラビア，ギリシャは実際の国民性担い手は否定され，ドイツのナチス権力から派遣された者あるいはその地の背反者の「政府」をもったこと，あの長期にわたった一連の激しい暴力と奪略，そのようなことは「国民性」とどのように折り合いをつけるのか。付け加わったのは「秩序あるヨーロッパ」，「ボリシェビキの撲滅」，「枢軸側の優位」というキーワードであった！最高に頭を捻って考え出されたものであるが，最高に乱暴で，最高に横柄である。それらは自信がなくコンプレックスをもつドイツのわんぱく青少年の心にしか訴えなかった。他の，たいていの，貴重な若人たちならばなおのこと，ますますより明確に次のことをみていた。すなわちドイツは，貧困化し，荒廃し，大量の血を流して，以前よりももっと外国の影響を入れ，その種族的特徴は根絶やしにされ，種族浄化措置と種族維持措置は，ユダヤ人大虐殺とユダヤ人拉致は万死に値する罪であるのだが，現実にたいする嘲笑となっている。国家理念は空転している。というのは犯罪者たちが国家を代表しそして恐怖の法を次々と発布しているからである。いったいドイツは，その理念において熱く愛されたドイツはどこにあるのか。ドイツ的「超人性」の鞭打つ野獣たちにおけるよりも，むしろ孤独な，ドイツ系文化的ユダヤ人のなかにあるのでは！かれらはドイツのゴルゴダの丘であらためて十字架に架けられた。かれらのうちの若干の者は最後までわたしにとって緊密な友人であった。

わたし自身，数度の訂正にもかかわらず，ナチスの側からユダヤ人であると告発された。それは穢れなき敵を「片付ける」最も安易な仕方であった。わたしがナチス党の標準規格図書『ドイツのユダヤ人』の159頁においてユダヤ人であり「赤色支援隊」《Rote Hilfe》の創設者であると（わたしは【政治犯の子どもたちのための】「赤色支援隊」の児童施設の超党派的な名誉委員会に属していただけなのに）「弾劾された」ことを，つまり迫害者に売られたことを知ったとき，そしてわたしが精神を失っていたドイツの教員新聞『ドイツの教育者』のなかで「ドイツ教育学へのユダヤ人の侵入」という論説が発表され，そこにおいてわたしがその先頭にたつユダヤ人として働いているとされたとき，わたしは著者（ユダヤ人研究所）と編集者に訂正を迫った。かなり長期にわたる躊躇の後，最終的に前者は，わたしのアーリアン系確認証の提示の後，わたしがユダヤ人でないことを確認し，そして新しい号でわたしをリストから外すと約束した。しかし

後者はとてもしみったれた仕方で，わたしがユダヤ人でないと認めたが，しかし「きみが付き合っている人をみれば，きみの人柄が分かる…！」という言い方でわたしに責任をなすりつけた。それは，ヒトラーが権力を奪う以前にその傾向のデマゴーグがまさに呪いながらヴィネケンの文章をわたしの文章であると言い立てたのと同じである。わたしはヴィネケンについてかれの冊子から引用しただけだったのに。いつも同一の方法である。すなわち「敵はなんとしてでもぶっ殺せ！」

今ではそのナチス国家の「教育学者」たちも同様のやり方をしている。ヴァイマー氏《Hermann Weimer：1972－1942》はなるほど有頂天になって「名誉」をナチス教育学のライトモチーフであると宣告したが，しかしかれの著書『教育学の歴史』のなかで，徹底的学校改革者同盟が，パウル・エストライヒの指導のもとで直接的に「未来国家」のために教育していたと確認することを図々しくもやってのけた！無知だったのか，あるいは憎悪だったのか。もしかれが志向されていた連帯性の道徳国家を，それはわたしが承認した唯一の国家であったのだが，考えていたのならば，かれは間違いなく正しかったであろう。しかしかれはわたしたちを狂信的マルクス主義の旗手であるとして怪しげなものとしようとした。「第三帝国」によって権利を奪われた人々にたいする騎士道のかけらもみられない。そう，いったい「名誉」って何ですか，ヴァイマー氏よ！

今やわたしのドッペルゲンガーの存在は，かれの責任でないのだが，賛美されている。わたしと同じポンメルン人で，同じ年齢だが，しかし右翼政治家であり，チリのドイツ人新聞の主筆であったり，ベルリンの株式新聞，短命であった「正午のベルリン」の主筆であったりしたパウル・エストライヒ博士，そして平和主義者，徹底的学校改革者同盟員および社会主義者であるわたしは繰り返し交替し，そして両者ともその交差から何千という困難をもった。「午後8時新聞」はわたしの所見をドッペルゲンガーの写真を添えて発表するというような事態まで起こってしまった。1933年以来の現実を言えば，わたしは死のごとき沈黙に沈潜し，そしてドッペルゲンガーは，以前は民族自由党員やドイツ民族党員であったのだが，ナチス党員として再登場した。ドッペルゲンガーは戦争のなかで経済相ヴァルター・フンク《Walter Funk》の伝記を書いた。その伝記をナチス党の報道部は称賛した。そしてわたしは今，何も知らない人々がわたしを著者であると考え，そしてわたしの「没落」について語ることを甘受せざるをえなかった。「枠外の」人生の悲喜劇！

青少年には援助がなかった。その状況は変わっていない。かれらの「総統」はかれらを裏切り，両親もかれらを放任している。この10年間，青少年教育について語られたあらゆることは，どれほど浅はかで，どれほど自暴自棄であったことか。消耗した理想主義者リハルト・ザイフェルト《Richard Seyferd：1862－1940 ドイツ民主党党員で，1919年から1920年までザクセン文部大臣を務めた。改革教育学者》は1933年に，最終的に政党の政策から解放されて，その固有の教育目標に貢献しうるナチス国家の学校における幸福についての論文をよくもずうずうしく書けたものだ。自分自身を裏切り，そしてその上，民主主義と民衆を裏切った理性喪失者だ！そして親たちも同じことだ！かれらはわが子の「幸福」のみを求め，よりましな親たちは苦痛のない成長の「若者的幸福」を求め，「ノーマル」な親たちは出世を求めた。それゆえある人々はかれらが考えている理想の思想世界を我が子には閉じ，他の人々はそれどころか我が子をナチスの諸組織に完全に奉仕させた。というのはナチスに属すことなしには，誰も教育，教授，研究，職業選択でうまくいかなかったからである。制服や階級章についての病的な功名心は，以前には理想主義的に「革命的」であった若者たちを汚染した。若者たちは「老人的」に振る舞い，軍人的態度と尊大さを身につけ昇進を促され，古典的なスタイルの下士官言葉を発し，髪の毛の一本一本にいたるまで若さを失い，ほろ酔い気分へと，密告者へと，テロリストへと教育された。そして親たちは（教師はまさに，良心的であることは犯罪であるとみなされた役人でしかなかった）傍観した。静かに，時折身震いしそして嘆きながら。かれらは模範的生活と情報付与によってかれらの子どもたちを指導するという最も初歩的な義務を怠った。家庭と国家（学校）の間の相克地域のなかで苦しい生活をすることは，親たちの意見によれば，か弱いかれらの子どもにとって耐えられなかった。実際その親たちは，180度対立する生活領域への子どもたちの組み入れ，生活の悲惨および決断にたいする義務への洞察による道徳性の形成というかれらの教育課題を解決し，その課題にまさに総じて取り組むためには，あまりにも臆病で，あまりにも無能で，あまりにも愚かしかった。かくして諦念的消極性へと退去され，そして子どもたちは市民として，軍人として十分なことを達成せぬまま，走ることを強いられた。それらの若者は大多数は見捨てられ，見殺しにされ，孤独に，真の親なしに成長していた！かれらがかれらの「総統」により「遅れた」親たちとの対立へと，親たちの「解体修理」へとそそのかされたことは，なんと驚きであることか。そのようにして数百万の家族のなかに深い亀裂，疑心，まさに敵対が生じた。ヒトラーもどきたちは家庭を粉砕し，抹殺した。他方では部族が称賛され，そして多産の母親たちには，軍需工場労働者のように賞金が与えられた。良心の品性がそんなにも堕落して地表を徘徊したことはかつて一度もなかった。その青少年たちは軍国主義的ロボット

性の崩壊の後初めて，大きな苦痛のなかで，深い憤怒のなかで，明るい喜びのなかでとてつもなく大量の，汚された過去のかれらを欺くとされた人々のすべてとかれらの素晴らしさを再発見するにちがいないだろう。かれらはその場合，どのような不正なことが，思想の自由と思考の深さへの，それゆえ知識と闘争のなかで戦いとられた責任の全体性への青少年の権利のために戦いそして苦悩しているわたしたちに起こったのかを把握するであろう。ユダヤ人の虐殺に続いて起こったのは，何千という老人，病弱な人，重病の人，心の病にかかっている人の殺害であった。すべての生活領域におけるように，慈善事業のなかでもまた突撃隊と親衛隊のブーツがあらゆる真の愛を，あらゆる畏敬を，死者への畏敬をもまた蹂躙した。「きちんと」機能する「保護」機関は，それはあらゆる人を「包括していた」のだが，もはや心を必要としなかった。青少年もまたかろうじてさまざまな制度，さまざまな制服，さまざまな地位およびあらゆる宗教性の代用品として，かれらの偶像崇拝だけを知った。

わたしは以上のような回想および認識を小部屋で書いている。その小部屋はわたしの息子とわたしを，1943年8月23日から24日にかけてのベルリンの恐怖の夜におけるすべてのわたしの財産の，とりわけ精神活動のためのすべてのわたしの補助手段の焼夷弾による焼失の後，クリフハウゼン《チューリンゲン北部の山地》の山腹に招いてくれていたのだった。ヒトラー時代はすべての恐ろしいことを経験させてくれたが，その恐怖の一夜もそのひとつであった。輝かしいペストもドイツ民衆の肉体をそれほど蝕むことはないし，それがドイツ民衆の肉体を完全に腐食してしまう危険もない。しかしいつの日にかきわめて深い深さが達成されるに違いなく，いつの日にか新しい建設が始まるに違いなく，いつの日かドイツ民衆は再び，1918年から1924年にかけて答えられないままであった偉大な問いを前にするであろう。すなわち「きみは打ち負かされた野獣から意気揚々とした，最も崇高な意味で理解された文化創造者に，地上の諸民族のサマリア人《イエスが隣人愛を譬え話で説明した聖書の「ルカ伝」のなかのエピソード》になりたいか。」当時，つまり25年前《1918年以降の数年のこと》にわたしは決して屈することなく説明した。「勝利は常に下品にする。真の勝利者とは，もしかれが認識することを学び，国民的かつ人類的に必要なことをなし，それゆえ地球の狭さによって必須である『宗教化』の決断を実施に移す場合！」には，いつも敗者のことなのである。大衆は魂の満足や幸福への道を歩まなかった。大衆は「名誉」と「勝利」と奪われた「富」についての魅惑的な太古の唄に従った。

（続く）[3)]

注

1）以下の3論説に続くものである。その際，第1報と第2報はエストライヒの幼少期から1926年までの自伝を抄訳したものであり，第3報は1926年以降の自伝の前半を抄訳したものである。

「ある政治的教育学者の生涯から－パウル・エストライヒの自伝の抄訳（1）－」『愛知教育大学研究報告』（第46輯（教育科学），1997年3月）

「ある政治的教育学者の生涯から－パウル・エストライヒの自伝の抄訳（2）－」『愛知教育大学研究報告』（第47輯（教育科学），1998年3月）

「ある政治的教育学者の生涯から－パウル・エストライヒの自伝の抄訳（3）－」『愛知教育大学研究報告』（第50輯（教育科学），2000年3月）

2）この文章以降のかなりの部分については，すでに次の拙稿にて紹介したことがある。ただし今回は2カ所の明らかな誤訳箇所の訂正を含め，あらためて翻訳しなおした。

「民族社会主義の時代を回想するパウル・エストライヒ－ドイツ教科教授史研究（Ⅶ）－」『愛知教育大学研究報告』（第42輯（教育科学），1993年2月）

3）原文で残り5頁程度である。次の第5報にて終了する。第5報は第2次大戦後のエストライヒの活動とともに報告する予定である。